註について

Ⅰ. 註をつける場合

　書籍を取り上げた時、人物を取り上げた時、本文で取り上げたエピソードの詳細をつける時、などなど註は本文の付け加え、補助知識として利用します。資料のソースを明らかにするのが引証資料ジストですので、註にはそこにかけないことを書くようにします。
その中でも最も多く利用するのが、書籍、人物に関する詳細の註です。卒論ともなると膨大な量ですが、気合を入れて付けましょう。初めのうちから数字を付けてしまうとあとが大変なので、まずはマーク(☆、ロ)などで代用しておくとよいでしょう。

Ⅱ. つけかた

　上付きボタンを押してから入力すると簡単です。

例
・*Leaves of Grass*『草の葉』[1]
・詩人アレン・ギンズバーグ(Allen Ginsberg, 1926-97)はホイットマンをテーマにした詩を数多く手がけている。[2]
・以下に詩群“Whispers”[7]全体を通しての「設計」(書かれた方)についてまとめる。
・アブラハム・リンカーン(Abraham Lincoln, 1809-65)[9]

付ける位置は基本的に註を付けたい部分の直後です。書名や人物であれば、その直後に付けます。あるエピソードに関しての註であれば、そのエピノードに関する言及が終わったところに付けましょう。(時代背景や、詩人の過去のエピソードなど)

Ⅲ. 註リスト

註リストは、本文と引証資料の間に入れます。

A.人名は、ここでは通常通り名前、姓の順に書く。
B.書き方は、名前を除き引証資料の書き方と同様。
C.辞書からの引用に関しては、特別な理由がない限り逐一付ける必要はない。
D.リスト作成時、章ごとに分けて書く。(註番号はそのまま続ける。)

註をどこまで付けるのか、というのは一概に言えません。書きすぎてもいけない、足りなくてもいけない難しいものですが、読む人に親切であろうという意識を持ちましょう。